

# 音楽教育における

## MUSIC MAKINGのこころみ



は し が き

この小論は、保育者養成機関において「保育内容研究・音楽」を担当する私と、そのクラスに出席した学生たちの音楽活動の一端であるMUSIC MAKINGについてまとめたものです。MUSIC MAKINGのような音楽活動を経験したいと考えて、その理論を提供したのは私ですが、その理論に生命を与え、音楽活動の経験を私たち自身のものにしたのは、参加した学生たちであったことを、はじめにまず記しておきたいと思います。

MUSIC MAKINGとは、文字通り、「音楽作り」を意

芝 恭 子

味する活動です。しかし音楽作りというと、五線紙に音符を連ねていく作曲のみ、活動の概念が限られてしまう傾向がありますので、生きた音楽作り、すなわち音楽を作り、演奏するまでので、すべての活動を包含する英語の用語を、そのまま使うことにしました。

さて、私たちのクラスで行なうMUSIC MAKINGとは、学生一人一人が全神経を集中してその環境を見、聴き、感じ、ことを通し、環境の中にあるさまざまなリズムやムードを伴った音を、楽器を用いて一連の流れを持つ音楽に変えて再生を試みる、創造的表現活動です。環境の中の音とは、たとえば車の音、足音、風雨など自然現象が作り出す音、また人の話し声、その他いろいろあげることができましよう。

このように、個人の生活環境が M U S I C M A K I N G の動機となり素材ともなるのですが、それは次のような理由からです。私たちおとなにとって、各自が置かれた日常環境はあまりにもあたりまえで、知りつくっていて、慣れ切っていますから、忙しい毎日の生活途上で、わざわざ立ち止って意識にのぼらせるようなことはしません。それどころか、その「日常性」からのがれようとして美術館を訪れ、音楽会に行き、スポーツに興じ、旅に出ようと努めます。ところが、私たちと同じ環境に生活する幼児の場合はどうでしょう。時と場所を同じくしても、彼らは決して私たちと同じ環境に生活してはいないことを幼児を知る者は認めざるを得ません。私たちが冷淡に見すごす「日常性」は、幼児にとっては発見や感動の宝庫であり、この発見と感動こそ、現代人がさまざまな、ニュアンスで追いかめる創造性の源であると考えます。

私たちが、幼児の創造性の成長を助けたいと真に願うなら、何よりもまず、幼児が存在のありつたけを注いで取り組み、探求し愛する対象に私たち自身の全人格も向けなければ、その願いは達せられないと思います。ですから音楽の分野では、幼児がその音やリズムに新鮮な驚きや喜びを感じてやまない日常環境に、私たちもかつて幼児の時にはそうであったにちがいない、あの敏感な

耳や澄んだ目をもう一度注ぐことなくしては、創造性豊かな音楽活動をする幼児の、真のパートナーにはなり得ないと考えたのです。実際私たちは、教えることには心を砕きますが、共にすることは忘れがちではないでしょうか。幼児が、殊に創造的活動で求めるのは、T E A C H E R ではなくて P A R T N E R ではないかと、最近とりわけ感じるものです。

ここまで記しますと、もう私たちの M U S I C M A K I N G の目的をあらためて明確にする必要もないのですが、これまでの論旨を整理する意味で添えておきます。M U S I C M A K I N G の目的は、個人がその全存在をかけて、各々の内面や外界を自分自身で認識する態度を養うことであり、続いてその認識を表現に移すための、何ものにも強制されることのない、自発的な機と、既存の形式や方法に縛られることのない、自由な思考能力を養うことです。これこそとりもなおさず、芸術の分野における創造活動の核となるものでしょう。個人がいかに作品の演奏を巧みに行なうことができるようになるかということは、活動の本質に添えて与えられる賜物のようなものです。なお、M U S I C M A K I N G の動機や素材は、ただ外界に限らず、個人の経験や文学作品を通しての想像など、個人の内面に蓄積された資源に基づいたものであってもよいことはいまでもありません。

一方このように論じてしまいますと、MUSIC MAKINGとは、何か一大事業のような、あるいはむずかしいもののような印象を与えるきらいがありませんが、決してそんな力みかえったものではないのです。表現をかえれば、個人が背のびする必要もひとまねする必要もなく、自分自身の存在をあるがままに知り、その経験があるがままに受け入れて表現すればよいのですから、これほど気楽なことはないはずで、人間と音楽との関係、あるいは人間が音楽する心を持つとは、実にこうした直接的な親しい出発点があつてこそ、はじめて豊かな実りを結ぶことができるかと考えております。

## 二

さて、MUSIC MAKINGについての説明をクラスで行なうにあたり、私は次のような二つのアプローチをこころみ、それに対する学生の反応を見ました。一方では、各自の環境や経験の中にある音やリズムに耳を傾けることの意義を話し、時をあらためて各自の発見した素材を表現に移す活動にとりかかるように促します。もう一方では、MUSIC MAKINGの意義を話し、引き続き表現活動にとりかかるように促します。

各アプローチに対する学生の反応はこうでした。すなわち、前

者の場合には、MUSIC MAKINGの提案を非常に積極的に受けとめたようです、各自の環境にある音やリズムの多様さ、おもしろさにあらためて驚きを示しました。そして表現活動にも積極的な、気楽な態度でとりかかって行きました。後者の場合には、話の内容に対してはよく興味を示しながら、いざ活動にとりかかるよう促す段になると、演奏能力に意識が集中してしまつたようです、「そんな大変なことが自分にはできるだろうか」「むずかしいことだ」というためらいの反応が数分続きました。私がその反応に一向おかまいなく、「さあ、やってごらんさい」とにこにこしているものですから、学生たちはやがて気をとりなおして三々五々散って行きました。

これは私にとって、音楽演奏に対する学生の心情を示唆された貴重な経験でした。学生に限らず日本人一般の傾向として、音楽演奏を生活の中に気楽に持ち込む態度より、音楽演奏をステージの上にしるか考えず自分に「さあ」と求められると、しろうとはむずかしくてはずかしくてといった、非常に消極的な態度が強いように思います。音楽活動を、演奏能力の有無のみ考えたり評価したりする受けとり方が、その人たちの意識下に存在するからでしょう。すべてではないにせよ、この現実があることを、私は心にとめておかなければならないと思ひました。MUSIC M

AKINGは、こうした意識の束縛から個人を解放してあげることも、大切な役割と考えてよいのだと、私は気付かされた次第です。

ところで、その後私にとって非常に興味深いことが起こりました。それは、活動開始後の学生たちの態度です。出発点においては、アブローチの方法によって多少ちがいを見せたにも拘らず、ひとたびMUSIC MAKINGにとりかかるや、全く同じ参加状態となっていました。

その時まで、何も意識しませんでした。来た自分の環境を、リズム・ムードという新しい角度から感じとり、認識しようとするれば、知らず知らずの中に自分のすべてを投入してしまう結果となり、見えなかったものが見え、聞こえなかったものが聞こえ、感じなかったものが感じられる驚きを体験したこと、また、MUSIC MAKINGは単なる擬音制作ではなく、各自の感覚的認識を心に一度通した後に残る、音のイメージから音楽を作るため楽しくも決して安易な仕事ではなかったことなどを、参加者の感想として学生が語ってくれました。私はこの経験が、それまで個人を不安にしていた技術コンプレックスを、創造的意欲にとって変えさせたのだと思います。

### 三

ここで、MUSIC MAKINGの過程を整理してみよう。活動内容を五段階に区分することができると思います。

#### (1) 素材の発見収集

各自あるいはグループで、生活環境の中の何に素材を発見するか決めて、その近くに身を置きます。たとえば、キャンパスの中に素材を発見することに決めれば、教室から出て校庭のあちこちを散策することになるでしょうし、家庭生活や過去の経験に素材を発見しようとするれば、教室の一隅にたむろして活動を開始するといった具合です。

#### (2) 収集した素材の整理編集

何の音やリズム、ムードが心をとらえたか、そしてそれらをどんな順序や方法で表現してみるかなど、グループの場合は各々の収集した素材を出し合い、検討してきめます。この段階は、いわば作曲者がモチーフを発見したり、インスピレーションが湧いて心に音楽をききながら、五線紙に音符を連ねては修正し、また書き続けて行く過程に相当するような活動です。

#### (3) 楽器の選択

素材のイメージを表現するのに最も適した楽器の選択を行ない

ます。求める音を探り当てるまで、自由にさまざまな楽器を、時間をかけてこころみていきます。この過程において、同じ楽器でも扱い方によっては、音色が千差万別に響くことを自発的に発見しますし、それでもなお求める音に行き当たらない場合は、楽器以外の物まで起用されます。たとえば、ジュースのあきびんの口を吹いたり、皮底のスリッパで床をたたいたりするのです。

これまでに用いられた楽器を記しますと、大、中、小ドラム、ボンゴ、ウッドブロック、トーンブロックス、クラベス、カスタンネット、スティック、ムチ、マラカス、タンバリン、リングベル、スティックジングル、クリーンベル、トリアングル、フインガーシンバル、大、小シンバル、木魚大・中・小六個一セット、木琴、鉄琴、チャイム、大・小カウベル、ギター、水笛、竹製鳥笛各種（以上、楽器店より購入した楽器）ガラガラ各種、ドラム、ミニチュア琴、その他（以上あきかななど廃物を利用して学生が作った楽器）土鈴・紙太鼓・陶製の鳥笛など各種（以上地方民芸品）で打楽器群を中心とした楽器です。

#### (4) 創造的表現の仕上げ

自分自身の作品を演奏して楽しめます。(3)と(4)の過程では、教室が創造途上の混雑で活気づき、音楽活動が文字通り生命に満ち溢れます。私は、MUSIC MAKINGの本質的経験はこ

に実現されたと評価しながら、ふと気がつくとき大にここで各グループの演奏状況を眺め、聴き、時には助言しながら（そのドラムはねじが締め足りていないのではないか、といった程度の）過ごします。また、学生の表現と関連のある音楽がレコードの中にある場合は、後でそのレコード音楽も併わせてきけるようにリストを作っておいたりもします。たとえば「雷雨と雨あがりの虹」を表現したグループに、ベートーヴェンの交響曲第六番「田園」の第四・五楽章とか、グロフェの組曲「大峡谷」の「豪雨」などを考えるわけです。学生が雷雨の表現に用いたドラムやシンバルが、これら大作曲家になる雷雨からも響くのをきいて何とも言えない感慨を覚えました。

ここまでの活動に用する時間について述べますと、とうてい一回のクラスで仕上げることはできません。五十分単位のクラスの場合は、学生のようなすを見ながら、あせらせないで、しかし無制限では活動がだれるでしょうから、二回あるいは三回と、必要にして十分な時を限って仕上げるようにすすめました。

#### (6) 他のための演奏

他の作品をきき合うために、いわゆるステージ演奏に当たることを行ないます。(4)の段階では、数グループが一つ場所で同時に楽器をならしているわけですから、各自にとっても、静寂の中で

自分の作品をきく機会は必要かもしれません。「かもしれない」と申しますわけは、活動中の学生のようすから、他のグループの音を気にする暇のないほど、自己集中をしていることが感じられるからです。MUSIC MAKINGは発表のための制作活動として出発したわけではありませんが、それにも拘らずこの段階が、いわばクライマックスとも、活動の結びともなるのは、このような理由からです。すなわち、他の表現に接することにより、自発的で自由な創作活動は、その作品がいかに多様性に富んでいるかということを知るためです。創造的活動とは、一つの対象をさまざまな角度からとらえ、表現し得るものですから、それゆえ自己の解釈や表現を大切にすると同時に、他のそれも尊重し楽しみ、次のMUSIC MAKINGの幅を広げて行くためです。実際同じ素材を扱いながら、グループによって作品の趣が全く異なることに驚くほかはありません。

#### 四

これまでのMUSIC MAKINGから生まれた音楽の素材をあげてみましょう。素材の傾向が類似したものはひとまとめにして標題をつけていますから、作品の数を示すものではありません。

#### (1) 雨

雨だれの音・小降り大降り、雷・いなずま・嵐など、雨とそれに付随する自然現象のリズムを写実的に表現した作品から、雨降りをバックに人物や蛙、かたつむりなど、雨に関連のある動物を登場させて、物語ふうな情景描写をこころみた作品。また雨の中に咲くあじさい、雨あがりの虹といった、そのもの自体は静的な素材のムードをとらえて、印象的描写をこころみた作品。

#### (2) 水

滝の音、川の音、海の音、水に波紋が広がるようす、水道の音、それから、水のカテゴリーを広げ、サイダーの栓をぬいた時、こまかい泡が立ちのぼるようすを表現した作品も、ここに入れておきます。

#### (3) 風

そよ風から嵐までと、各々の風に吹かれるものようす。たとえば風鈴・草花・木の葉など。

#### (4) 鳥のさえずり・虫のこえ

身近な庭からきこえるものや、山の中をハイキングしながらきくものまで、バックのちがいで素材のムードが変わります。

#### (5) あられ・雪

雪が降りやんで銀世界を包む静けさが、音で表現された作品も

含まれています。

(6) 足音

子どもの足音・おとなの足音・大男「ジャックと豆の木」のやおすもうさんの足音・鎖でつながれた奴隷の足音など。

(7) 都会の音・田舎の音

車やビル工事の騒音に明け暮れる都会の重苦しい空気やのどかな田園風景を、各々写実的あるいは印象的に表現した作品で、これまでにあげたカテゴリーと重複しています。

(8) 家庭生活

朝食作りに忙しい台所のように・食事中の会話・出勤登校のようす・家族を送り出した後主婦が味わうひとしきりの休息を、一連の作品にまとめたものから、料理の場面に焦点を絞って表現した作品があります。たとえば、肉にころもをつけ、調味料をふりかけてカツをあげる過程・野菜を洗い、きざんでいため物をする過程・卵をフライパンに割りおとして、目だま焼きを作る過程・やかんに水を汲んでから、湯が沸騰する過程・ふたをしたフライパンの中で、つきつきにバブコーンがはじけて行く過程などさまざまです。

(9) 花火

線香花火から打ち上げ花火が夜空に広がるようすまで。

(10) 動物園の動物たち

これまでの素材に加えて、上野動物園（こども動物園も含む）における校外授業を展開した一例として、動物園にいる動物たちを素材にしたMUSIC MAKINGも行なわれたことを付記しておきます。動物は、幼児の歌や動き、童話に繁く用いられる素材です。しかし保育をリードするおとなが、自分自身で見、聴き、触れるようなかたちで、それらの動物と知的情緒的親しさを持たないまま、既成概念でのみ作品を扱っている場合が多いように思います。やがて保育者になる学生が、歌や童話に登場する動物たちの生きた姿に接することによって、動物に対する生命あるイメージを把握することの必要性を感じました。これが、動物園見学を年間の授業計画に入れた理由です。

結 び

MUSIC MAKINGは、こうして幾多の楽しく美しい音楽を生みました。主たるねらいはこうした結果ではなく、活動過程にあったにも拘わらず、MUSIC MAKINGの結びは、理屈ぬきに楽しく美しい音楽をきき得た感動でした。一つの演奏が終わると、感動の沈黙やきざめきが、また作品によっては爆笑がクラスを覆いました。といいますより、おそらく最も楽しみ感動

したのは私にちがいませんから、演奏後の聴衆の反応を、厳密な意味では客観的に記すことができないと思います。私はそのクラスを進める責任を持つ教師であることを、その瞬間瞬間には全く忘れさせられておりました。

これまでに私の心を打った美しさは、一体どこから来るものなのでしょう。それは、音楽理論に照らして整っているからでも、演奏技術が専門家のレベルにあるからでもありません。各自の全人格が投入されたところから来るのです。生命ある美しさとは、このことを指すのではないでしょうか。個人の内面に蓄積されるこの感動と経験の実感こそ、次の創造的音楽活動を促す源であり、音楽の他の活動分野にも生命を与える源になると考えます。

MUSIC MAKINGを通して確信を得たことは、学生は、そして私たち人間は、一人残らず優れたMUSIC MAKERであるということです。何のためらいもてらいもなく、この事実をすなおに受け入れることが、音楽教育のあらゆる活動に先がけてなされなければならないと考えます。幼児に創造性豊かな音楽生活を経験させる役割を担う者は、自分自身この自覚と安定感なくして、どうして喜ばしい責任を全うすることができません。もう一度申します。MUSIC MAKINGは、おとなのあたまと心を、幼児のあたまと心に返らせて、生まれながら

に与えられている音楽するちからを、再認識するために提供された一つのこころみです。かつて幼稚園で保育をした経験から、私はMUSIC MAKINGを幼児の音楽活動としても用いることができると考えますし、ぜひその機会を持ちたいとも願っております。また、ピアノ曲に合わせてリズム打ちをする楽器演奏より幼児にとってはおもしろいかに楽しく意味がある楽器活動ではないかと考えます。

しかし念のために、これだけは読者の方々と確認しておきたいと思えます。すなわち、自分自身がMUSIC MAKINGの全過程を十分に楽しみ、苦心し、感動する経験をぬきにして、いきなり一つの方法やテクニックとして幼児に「させる」のならば、MUSIC MAKINGの真の収穫は決して与えられないということです。私がMUSIC MAKINGを幼児に経験させたいと考えるなら、まず自分の音楽を幼児に演奏してあげることから始めるでしょう。それよりも前に、幼児と共にあらゆる機会を通して、生活の中にある、音やリズムを発見したいと思えます。この過程では、先生はむしろ幼児で、私は学生たちのMUSIC MAKINGの時のように、驚いたりこにこしたりしながら、幼児の発見を追いかけて行くにちがいありません。

(東洋英和女学院短期大学)